第九章　伊勢參宮

（一）

文政七年は右源次四十五歳なりき、三十五歳天命直受を得たるより、早や十一歳を過ぎぬ、一代の運命を天に任せたる後は、年月の流るゝをも知らぬまでに修業しぬ、此れ皆な天照大神の御蔭なり、享和三年二十四歳の時は、三月十一日出發して、伊勢神宮に參詣したる例あり、今年はまづ京都へ參りて、餘所ながら禁離御所も拜すべく、神祇官職吉田家へも伺候すべく、それより伊勢へ參詣して天照大神の御開運を祈り奉らん、

右源次は斯く思ひ立ち、舊蹤を追ふ心にて、三月十二日朝七時半、信者の者なるべし久之介外二人を俱して今村の家を立ち、翌日三石より船へ乘る、中戸あたりより西風吹きて、舟走ること飛ぶが如くなりければ、例の歌ども讀み出で興じぬ、

足いらずとぶが如くに行く道は

爰ぞ高麗か原の道なり、

十四日には舞子の濱を過ぎ、一の谷を經て兵庫に着く、船上二日の旅、春霞長閑に彼も一入和ぎて、此上もなき日和なりき、徒歩して、暮れ行く春を惜みつゝ行くほど、久之介麻疹に罹りて、熱氣次第に激しくなりたれば、西の宮より馬を雇ひて乘せ、尼ヶ崎より船に乘りて、西刻（今の午後八時頃）大阪へ着きたりき、その夜大雨、樋の上の櫻名殘なく散り行くかと心痛はし

然も久之介は熱氣去らず、病勢次第に募る如く見えたれば、一両日は逗留して、その經過を見る事に定め、枕邊に付き切りて病氣の全癒を祈りしか、十六日も雨竭まねば、博勞町の稻荷社に參詣して、例の如く皇運の御開運を祈り、久之介の病氣忽ち全快すべく念じ終りて、拜殿を見返る、境内は雨中ながらに賑ひて、人形芝居の看板、木戸前の群集、さも面白氣に見えたれば入りて見る、

十七日は天まだ晴れず、雲の往來常ならず見えたるが、午時ごろより晴れて、久之介の病勢も且つ衰へぬ、右源次は有難く感じつゝ、午後座摩の社へ

參詣し、難波新地の見世物を見て目を驚かしたるか、夕暮れ宿へ皈りて見れば、久之介さしもの病氣も、已に七八分は快き方に對ひ居たり、今は心安しさらば發足せんとて、久之介には一人の看病人を付け置き、おのれは一人を伴ひて、その夜八軒家より舟に乘る、天晴れ心澄みて、夜寒しみ〳〵身に迫るにつけ、平生の有難さを感ずる事深かりき、

十八日の朝はの〳〵と明け放るゝ頃伏見へ着きて、稻荷の社へ參る、右源次此時の事を記して「伏見の稻荷へ參、則正一位勸請願意賴置」云々と書き切る、意氣の高きを見るべし、識見の尋常ならぬを思ふべし、

その日京都へ入りて、直ちに神祇官吉田侍從を吉田村の邸に訪ひ、執次役人に刺を通じ置き、十九日改め訪問して、神官の冠狀を得き、父宗繁の通稱を繼ぎて、左京と改めたるは此時なりき、左京の手稿に成れる「伊勢參宮心覺」には明細にその日及び伊勢道中の行動を記す、曰く、

夫より町内へ見物に出る先吉田日本六十餘州御神を勸請有し靈地を拜し夫より眞如堂黑谷へ參り皈り廿日にしんかんにんの宮へ參り夫より大谷宮へ

參り知恩院へ參り低園へ參り夫より清水へ參り夫より四條方より皈りよく廿一日百万へんへ參り夫より下加茂參夫ゟ上加茂今宮大德寺夫より北野平野金閣寺夫より壬生東寺夫より六角堂西本願へ參り夫より皈り廿二日一日大雨ふり廿三日京都を立ち夫より三井寺へ參畫仕度いたし色々見物有り夫より八ッ過に石山へ參り彼近江八景面白き事限りなし夫より草津迄行き藤屋三左衛門方へ宿り廿四日に立參り石邊に休み夫より水口龜屋治右衛門方支度いたし夫より坂下龜屋にとまる宿至而よし廿五日夫よりせきを越えむく本といふ處に休み夫より津へ參り雨ふり七ッ過に爰へ宿とる廿六日六家といふ處四つ過に支度いたし夫より●松坂へ行き妙照迄行く爰にてまた支度いたし夫より伊勢ゆき白髮大夫へ參り段々馳走にてよく廿七日色々身を清め夫より四ッ時分に參詣致し神供など備へ難有御拜いたし夫よりまた大阪へ皈り支度などいたし其まゝ外宮樣へ參り其日直に串田宿紅葉屋九兵衛とまりやと至つてよし明廿八日夫より山田と申す處へ參り晝支度いたし夫より島ケ原といふ處へ參り干鰯屋利右衛門と申す所に泊宿至つて惡し殊に此

三日程足をいため各つかれもことに旅の難義平日の難有事思しられけり去なから何もかもさかばせつけ候得うき中にも難有夫より朔日彌足いたみなからかさぎといふ處まで參り支度なといたし夫より舟に乗り木津へ參り夫より奈良へ參りとうふや庄兵衛と申者處へ參りよく二日……

然して四月九日四週日に近き旅を終へて恙く家へ飯る、家旅門人出で迎へて歡ぶ事限り無かりき、

左京の伊勢參宮は、一身一家の幸福を祈り念するにあらずして、一國に天照大神の御開運を祈るなりき、伊勢神宮に參拜して、天照大神の御開運を祈り奉る、その中に深き意味あり、その中に深き眞心あり、

左京は天保元年閏三月より、毎月百社參りの立願を起し、十個年の間繼續すべき旨を誓ひたるが爲め、爾後つき〳〵に執行あり、同三年は何かに忙かしく、又た大患にも罹りたれど、一たんの立願を反古にすべきにあらじとて月々の參詣懈り無かりき、

同じき四年三月十六日出發、再び伊勢參宮の途につく、高時も一身一家の

幸福は願はず、神官の前に金一封をさし出して「宜しく天照大神の御開運をお祈念下さるべし」と、口上せる事例の如し、四月十一日道中恙なく飯宅す、

此時も京都へ立ち寄りて、吉田侍從の邸に伺候八百万神の神靈を勸請せる靈地を拜みて、やはり天照大神の御開運を祈りたるは云ふ迄無し、同時に、両親の爲め靈神號を下さるべき旨奉願ありて、直ちに聽許を得、槃根靈神、永壽靈神と稱すべく許可を得たるは、孝行の德達きたるなり、左京の歡び譬へん方ぞ無き、

次には同じき六年三月十九日出發、四月三日飯宅しき、此時は道々御拔として十八日千度、十九日千度、二十日千度、二十一日千度、二十四日二千度二十五日千度、二十八日二千度、二十九日千五百度、朔日千五度、二日四百度、三日千六百度を奏上し、次には弘化二年三月四日出發、四月中間飯宅しきこれにて前後四度の參宮なり

第十章　奇蹟

（一）

天保三年三月二十三日、春も早や暮れんとして、加佐米山に霽色澄み、一もと二もと雲の如く簇り咲く遅櫻、妙法院の未刻の鐘に搗き動かされて、一時にむら〳〵と碎け散る、その花葩雪と飜へりて、何れか花、何れが蝴蝶、滿山香りに包まれて、石も薫り枯木も匂ふ、經塚に晴れ開けて、老鶯の鳴く聲憐れに、花の雫落つる處笠朝臣の古へも偲はれぬ、

此の好き晴れに割子竹筒携へて、半日の遊樂、友人多くと打ち連れ、仲間下僕五六人を伴ひて、此の山へ蕨採りに來りしは、生阪家（池田丹波守）の家來桧尾長三郎なりき、最初のほどは歡聲滿ち充ちて、張り巡らせし幔幕に笑ひ聲波打ち、城下の長閑さ、此處の集會より出づるかと面白く見えたるが如何にしたりけん、殺氣見る〳〵中に漲りて、口論喧しく聞こえたるよと思ふ間もなく、一條の白電空を切りて、颯と迸る血汐の色「あれや〳〵」と、

詈り騷き亂れ遁ぐる人々、宛ら餓虎に逐はれたる羊の如く喘々たりき、此時血に染みたる一刀提げ、片手に幔幕の裾引き上げて、まづ半身を現はしたるは、顏の色蒼さめ、髪の毛亂れて、両眼に朱を注ぎたる如く見ゆる丈高き武士、淺黄紬の小袖の袖に紫き血の痕を斑々印けて、吐く息焔の如く、遁げ行く人のうしろ姿をきつと見送り、

「これさ、松尾姓さ、氣を鎭め召さ、怪我あつてはならぬ」

幕の中に聲ありて、氣をはし氣に立ち出づるは、友人なるべし、二十五六の士なり、すり寄りて、刄持つ手を押へんとするを、長三郎は振り向きさま

「不禮すると怒さぬ、其處除け」

云ひさま、血刀取り直せしかと見る間に、友の士は横薙に切り伏せられて

「あつ」と、叫ぶ聲さへ引き得ず、枯木を倒す如くばたりと倒れぬ、

「又切つた、酒狂人が又切つた」

云ふ聲暮風に傳はりて、滿山の花見客、雪崩を打つて遁げ惑ふ、長三郎は早や二人を切りぬ、滿身の血は逆せたいまゝに逆せて、面色次第に沈み行く

手に持つ刄の尖頭よりは、たら〳〵と紅の露滴りて、皿の如く坐りし眼に、物凄き光り閃めく、

長三郎は歩むともなく歩みて、ふら〳〵と山を下る、血に飢へたる悪鬼は見るほどの人、逢ふほどの人の命を、一撃の下に奪らでは止まざりき、然も長三郎は藩中の剣道者、刄は傳來の業物、一たび振ればその下に人一個必ず斃る、岡山の城下へ出づるまでに、二十三人を手に掛けて、早や眞心無かりき、早や人間らしき心無かりき、城下の町々を驚かして、夕暮れ近く屋敷町へ入る「人切鬼が通るぞ、近づいて怪我するな」と、人々互に戒め合ひて、中には両戸を繰り下す町家もありき、二階へ駈け上りて、戰慄へる女小供もありき、

此の日黒住左京は城内の某家に招かれて、天地の道を説くべく赴きたるが申の上刻講釋果て、今しも飯路に向ひたる時なりき、例の榔榔子染の木綿羽織着て、淺黄紬の着物、疎末なる袴、ぽく〳〵と歩みて、内曲輪中の町御門内まで來掛り、不圖見遣る彼方に殺氣虹の如く立ちて、血刀を提げたる士

中有を行くが如くふら〳〵來る、髪髪亂れて、士よりも蒼き面の上に掛り襟とも云はず、袖とも云はず、滿身に紫き血を浴びて、きろ〳〵と四足を見廻すさまの物凄さ、心弱き者は一目見て氣絶やせん、

親戚の者なるべし、二三人の男十間ほどうしろより從ひ來れど、恐れて近づく者無かりき、長三郎は幾度も刄を打掉りて、眞直に進み來る、一二歩すれば中の町御門なり、血刀下げて内曲輪を一歩入れば、家名忽ち斷絶、武士の作法に由つて、切腹の沙汰あるべきは勿論なり、

長三郎は此方より進み行く、左京は彼方より歩み來る、その間僅かに一間餘りとなりぬ、然もその一間は、城内城外の境界なり、長三郎一歩を進めば家名斷絶の悔を見るべき生死明暗の岐るゝ所なり、

長三郎の目は前に左京を見て、さつと光りぬ、血刀を提げたる手は、人間の香を嗅ぎ付けたる狼の牙の如く硬くなりぬ、見る者はハッと驚く、黒住先生あはや無惨の刄の下に害はれたまはん、丸活し、丸助かりを説きたまふ御身が、忽ち此處の露と消えたまはん、誰か助け參らするものなきか、早や早

お遁げなされぬか、

されど左京は述げんともせさりき、長三郎をじつと見上げて、つか〳〵と進み寄る、長三郎は血刀を振り上げて、今にも切つて捨てんとす、その一刹那、あはれ左京の肩岬、柘榴の實の笑み割れたる如く切り裂かれやすらんと思ふ一刹那、左京は眞心を詞に籠めて、

「御場所柄でござるぞ」と、云ひぬ、

その聲はさのみ高くも無かりき、人を壓するほどに大きくも張られて無かりき、然も長三郎は忽ち血刀を振り捨てゝ、びたりと大地に両手を支きぬ、慓ふ聲の下より、

「恐れ入つてござります」と、平伏しぬ、

見る者二度の驚き、恐る〳〵背後に從ひ居たる親戚の者、はら〳〵と駈け來りて、漸うに取り押へぬ、

左京は長三郎を一目見たる時、長三郎の手に血刀を見たる時、雲の如き同情胸を衝いて出でぬ、彼の士、氣や狂ひけん、酒に性根や奪はれけん、城内

城外の差別さへ知らず進み來る、一歩御門内に入れば波の身は破滅なり、彼の家は斷絶なり、助け遣らざるべからず、と思ふ純潔水の如き眞心油然と湧き來りて、長三郎の手に血刀あるも忘れ、長三郎の周圍に殺氣の纏へるも忘れ、只彼の士助けたさの一心に據りて、つか〳〵と駈け寄り「御場所柄でござるぞ」と、心付けぬ、長三郎は左京の美しき同情に胸を打れて、思はずも我に返りたるなり、思はずも我に返りて血刀を捨てたるなり、左京一心の誠は二十三人を撫で斬りせし酒狂人の心深く徹せり、酒狂人の魂を本心に置き直せり、

此の有樣を見たる人々は、左京の人徳の高きに感じて、心の中に手を合せぬ、左京は只默々たりき、多くの人に引き立てられて、綿の如くに歩み行く長三郎を見送りて、彼の爲めに熱誠ある祈念を罩めぬ、

長三郎は自ら耻ぢてその日の中に切腹しぬ、家名は法に由つて取り潰されぬ、されど長三郎は悪人にあらず、酒亂に乗じて大罪を犯せるなれば、親戚の人々懇に後世を吊ひぬ、位牌は今も郡長小野禎一郎氏の許に祀られあり、

(二)

天保十二年十月四日、左京は小野新兵衛を近く呼びて、御身は彼の五明楼呑計の門人なり、呑計は易の大家、卜筮に神を得たりと云ふ、われ聊か思ふ處あれば、此の三封につき、封を頼み下されまじきか、と白紙にて封せしを三個まで取り出し渡しぬ、新兵衛は何事かと怪みながら、旨を領して呑計方へ駈け付けぬ、呑計は家にありき、新兵衛の云ふ詞をつく〳〵聞きて、

「諾し〳〵」と、快く承引き、やがて熱心に卦を立てたるが、さも驚きたるやうに「さて新兵衛どの、これに離上離下、震下離上、巽下震上の三を得た、此の白封の中には、高徳の人の名が記しあるに相違ない、われ多年此道に志して、さま〳〵の封を立てたれど、今日はど尊きを覚えたことでざらぬ」と、云ひぬ、新兵衛は不審の眉を顰めて

「はて喃、するとこのお三封の中に、徳の優劣ないと仰せかの」と、問ひ返し見ぬ、

「勿論相違でざる、離下離上の卦を得た人も、巽下離上の卦を得た人も、古今獨歩の大徳ではでざるが、震下離上を得た人には及び申さぬ、思ふに誰人か、已れの徳の厚薄を占はせられたのであらう開封しては何うでざらう」

呑計は疑ひの雲晴れ難き様なりき、

「御尤でざります、お頼み爲された方は、何の様に仰せ爲さるか知れませぬが、私の計ひで開封致します、お待ちなされませ」

新兵衛は云ひながら封を切る、孔子、釋迦、黒住左京と一封に一個つゝの名を認めありき、然も呑計が三個の中、優れて徳高しとひたる震下離上（初爻變）の易を得たる封の中には、黒住左京の名鮮かに記されぬ、左京の徳大聖よりも高きを示すなりき、新兵衛は嬉しさに聲を上げて、

「こりや黒住先生でざります、黒住先生第一の徳が現はれてざります

「此様な不思議はない、まことに前代未聞の徳人、後世恐るべしとは此のお方の事でざる」と、呑計は舌を捲きぬ、

新兵衛は呑計の家を辭して、逸散に黒住家へ駈け戻りぬ、左京は例の居間

に座りてありき、新兵衛を見て

「御苦勞でござつたの、呑計何の樣に申したの」

新兵衛は次の間に平伏しぬ、年來の懇意、師弟の關係は生きたれど、さばどの遠慮も無く同席し居たるが、今日は敷居を距てゝ、幾度か拍手しつゝ謹みて

「唯恐縮の外ございませぬ、只感服の外ございませぬ、まづこれを御覽ませ」と、呑計が占ひたる爻を示し、更に呑計の陳述したる事共を詳しく語りて「今まではそれほどゝも存じ寄らでございました、不禮は幾重にも御宥しなされませ」

左京は笑を含みて、

「新兵衛どの、何を云はるゝ、此方には聊も德ございらぬ、大聖と名を列ぬるさへ、恐れ多くござる、それに釋迦、孔子などに比べ、高德であらうなどとは、夢にだも存じ寄らぬ」と、一たん詞を切つて、稍々容を正すやうに「黑住左京は取るに足らぬ凡人ながら、天照大神の御德は弘く天地を覆ひ、遠

く千古を貫き申す、日の神の宿らせたまふ處、覆載の間、何物の及びもあるまいと心得申す、斯う云ふては如何なれど、此方の胸中には天照大神宿らせ在す、その御德に由りて、釋迦よりも孔子よりも登き爻が現はれたのでござらう、呑計易の大家として此方の姓名を二聖人の上に置いた、天照大神御開運の時節到來と思はれる、何とも有難い事、天地の道は太千世界に滿ち溢れぬ處もない、日の神の御光りの屆く處、悉く誠の道開け行く瑞相と見え申した、以來は一際丹誠を抽んずるでござらう、お身樣も隨分心を罩めて、天地の道をお究めなされ」と、云ひぬ、

新兵衛は愈よ深く感じ入りて、

「有難い事でございます、嬉しい事でございます、釋迦も孔子も古今に二人となき大聖、況して季の世には再び斯くの如き御方生れさせ給ふ事あるまじと存じ居たるに、その両聖よりも優れたる御方、當村より顯はれたまふ事地下一統の歡び、且つは地下一統の譽れ、權之頭殿も榮三郎殿も、此事をお聞きなされたら、さぞ御滿悅と存じ申す、有難い事でございます、結構なて

とでございます」と、再び額を摺り付けぬ、

「いや〳〵よくお聞きなされ、左京一人に限つた事ではない、神國に生れた人は、生れながら夫程の幸福を得ぬはない、我を離れて難り氣無い心になれば、誰にても神樣と一体、我を離れて生きたる誠一つとなれば、天心とて天照大神と一体の心になる、此處をよく御合點なされ、お前も天地自然の道を會得して、神樣同樣の心となり、小野新兵衛と紙に書いて、呑計に下はせて御覽なされ、孔子釋迦よりも大德に相違あるまじき結構な爻が立つであらう」と、說く、悠然たる態度、霞に包まれたる滿月、長閑に天に懸る如くぞ見えし、

(三)

伯耆國東伯郡松崎町に伊東定三郎と云ふがありき、弘化三年三月十日の金刀比羅宮祭禮に參詣せんとて、同じ月七日の夕、兒島瑜珈より船に乘りぬ、同乘者二十二人あり、その夜は雲晴れ、夕月さやかに照りて、遠き海原、一

面の鏡を展べたるが如く穩かなりしが、翌八日小串沖にさしかゝる以前より風強く吹き起り、雨さへ加はりて、大山の寄するが如き怒濤、寄せては返し返しては又た寄せ來る、その大波小浪に弄ばれて、舟は木の葉の飜るが如く深き波間に入るかと思へば、忽ちにして高き山の頂に押し上げらる、二十二人の乘客生きたる心地もなく神佛の御名を唱へて、一心に晴を祈る折から、舟は見る〳〵覆へりて、乘客一同浪間に沈む、定三郎はあッと思ふ間に沈みたるが、これぞ海底ならんと思ふ時、双の脚に力を罩めて、懸命に踏みたる爲め、彈き返されて海上に浮び出で、更に海上の波を蹴つて、三尺ばども高く上りぬ、定三郎は只夢心地なりき、何んの感じもなく、浪のまに〳〵一身を任せ居れる中、救助船の爲めに救はれて、辛き命を拾ひ得たり、

波は何時の間にか鎭りて、多くの人を呑みたる海は、物凄きまでに波の色變り、うね〳〵うねる度ごとに、凄まじき音を立てる、定三郎は只ある濱邊に助け上げられて、暫時は養生、衣裳調度の始末などして、次の便船を待ち合す中、思ひ掛けもなき疑ひかゝりて、福島の番所より「足止めを命ずる」

旨の沙汰下りぬ、定三郎は不審晴れざりき、恐しき難船に遭ひて、九死の中に一生を得たれど、身に犯したる罪はあらず、何んの咎、何んの疑ひありて足止めを命ぜられたるか、如何に考えても合點行かざりき、

それも難船者一同への御沙汰ならば是非なけれど、足止めは定三郎一人なりき、僅かに命を助かりたる人々は、便船を待ち合せて、思ひ〳〵に出發する中を、定三郎只一人は福島の番所に置かれて、晴れ行く暑影と、次第に鎮まる海面とを空しく眺めぬ、

天は晴れたれど、定三郎の疑ひは晴れざりき、間もなく牛窓の大庄屋へ引き渡され、備前藩の取調を受くるに及びて、始めて嫌疑の次第分明しぬ、

「其方切支丹波天連宗門の者あらう」

最初の尋問はこれなりき、

定三郎が海底探く沈みて、忽ち海面に浮み上りたるさへ、已に常人の爲さるべき業ならぬに、海上を三尺ほども高く昇りたるは、必ず切支丹の魔法を使へるならん、との疑ひなりき、定三郎此時は心付かざりしが、さしもの大

風一時に鎭まりて、波も又思ひの外早く穩かになりしを、やはり切支丹の爲せる術と思ひたるなり。

定三郎は身に覺えなき事、只管神佛に飯依する身が、天下禁制の切支丹なと信仰すべき謂れ無き事をさま〳〵に辨解したれど、役人の疑ひは容易に晴れず、やがて岡山の牢獄に投じられぬ、天災より天災を生みたるなりき

切支丹宗に入る者は、反逆同樣の處置を受くべきに由りて、詮議も極めて嚴格に、又た極めて丁重なりき、定三郎には入牢を命じ置きて、一面鳥取藩に交渉し、松崎町及び定三郎の關係地に亘りて、手を盡し調査したるが、立派なる且那寺はあり、疑ふべからざる人別帳はありて、心掛けも正直に、土地人の氣受も好き者なる事分りたれば、二ヶ月の後放免せられき、定三郎は更に夢見る心地しつゝ、一たん旅宿へ引き取り、まづ身體を清むべく旅宿の前の床屋へ入りて、亂れたる髪を理め居れる時、二三人の客入り來りて、口口に浮世話を初めぬ、定三郎は髭を剃らせなから聞くともなく聞く、

「お前病氣は快い方か」一人の男は問ひ掛けぬ、

「お蔭ですつぱり快うなつた、思ふても身の毛が立つ、三月八日兒島沖の大荒れ、今夜波間に沈んだと思へば、それから此方へ生き延びたゞけが儲け物、命を取られても、悔む所ないやうなれど、爾う行かぬが浮世ぢや、やはり會は惜しいもの喃」

「命の惜しうない者はない、やはりお陽氣をお受けなされたか」

「黒住先生のお陽氣ぢや、眞に生神樣と云ふは彼のお方、お前も兒島沖の大荒を知つてぢやあらう」

「目には見ぬか、話には聞いて居ります、甚かつたさうぢや喃」

「お話にはなりませぬ、山のやうな波に呑まれて、死んだ者が二三十人はござります、それほどの大荒れでさへ、黒住先生の御神德で鎭ります、一寸した病氣ぐらね、二三度の御陽氣で全快するに、不思議ぢやらぬ喃」

此の談話の中に、定三郎は髭を剃り終りぬ、面を洗ふ間もなく近寄りて、

「物をお尋ね申します、あなたも三月八日の大荒れをお食ひなされたのでございまするかな」

春の高き商人体の男は、蒼い長い顏を振り向けて、

「命拾ひをしてござります、これも皆な黒住先生のお蔭でございます、お前先生を御存じかな」

「いや、一向に存じませぬ」

「それでは難船にお助かりなされたのでは無いか喃」

「難船には助かりました、不思議に命拾ひ致しました、然し後の災難が甚うございました」

「はて難船に助つて、黒住先生の御思を知らぬは、此の結構な日に活きてお日樣のお惠みを辨へぬも同樣でございます、あなたのお罰が恐しうございます」

彼の男は云ひ終りて、天照大神の御名を唱へぬ、

「存じかけない、それは何んの理由でございます」

「親方々々」と、彼の男は主人を呼んで「この人は恩知らずぢや」

「腹が立ちまする喃、其樣事を聞くと腹が立つて仕方ございませぬな」と、

床屋の主人は床置に腰を掛けたまゝ、定三郎を睨み付けて「お前さん、命を助けられた大恩も知らいで、ようも人中へ面をお出しなされまするな」

「親方、お客人、下剃衆もお聞きなされ、私も伯州では人に知れた身、三十年來不義理をした覺えぢさらぬ」と、定三郎はきよと〳〵目を光らせながら「それを今のお詞、私は合點行きませぬ、万一義理を缺いた事あらば、何の樣にもお詫せでは恊ひませぬ、忘れるにも忘られぬ三月八日、私は夢を見たやうぢや、今思ふても狐か狸に魅されたやうぢや、彼時命拾ひをせずは、今度の災難にも掛らぬ筈、お蔭で一月あまりの間、暗の中へ投げ込まれてございます、生れて以來、臭を嗅いだ事もない勿槽飯を食てございます」

「いよ〳〵不思議、すると何も知らしやらぬな」

春の高き男は又問ひぬ、

「大波の中で命助かり、福島の御番所から牛窓の庄屋へ送られ、とう〳〵岡山の牢屋へ投り込まれた、これだけは忘れませぬ、忘れやうとて忘れると能きませぬ、ぢやがその他は何も知らぬ、どうして命が助かつて、どうして切支丹のお疑ひを受けたのか、さつぱり理由が分りませぬ」

「さうか〳〵」と、床屋の主人は初めて理由が解つたやうに「それで全然分つた、すると彼の日の難船客に、波天連の魔法遣ふ悪人があつたと云ふて、皆人み戦慄したのは、お前さんでござつたか喃」

「私ぢや、然し少しも合點行きませぬ、國許でお聞き下されても分ります代々の眞言宗、且那寺に人別もござります」

「それで疑ひが晴れて戻られたか、まづ芽出度い命拾ひをするなり足止め庄屋の手から本牢へ送られたのでは、委細をお知りなされぬも有理ぢや、まづこれを御覽なされませ」

主人は定三郎を見返りながら、幾度も拍手して神棚の前へ進む、神棚の前の柱に、

波風をいかで鎮めん海津神
天つ日を知る人の乗らしに

との一首鮮かに書かれたる奉書が張りてありき、店頭に店合せたる客も下

剃も、主人が繰返しその歌を唱うるを謹み聞きて、心の底から敬虔の意を表はす、定三郎も何となく高高の念に打たるゝ心地して、思はずも頭を垂れぬ

「お客人、此のお歌ぢや、このお歌を黒住先生がお讀みたなされたのぢや有難いこと、不思議な事、するとさしもの暴波が鎮つたのぢや」

「ちッとも存じませぬ、詳しうお聞かせなされませ」

「話さずには居られませぬ、お聞きなされ」と、主人は火鉢の前に坐りて、まづ烟草、一言にても疎には云ふまじき用意の下に「恰ど黒住先生も小豆島の信者から招かれて、その日舟にお乘りなされた、乘り込みのお客も八九人はござつたげな、それが兒島沖へさしかゝるゝと、お前さまも御存じの大荒れぢや、山のやうな怒濤が今にも舟を呑まうとする、舟夫も乘込客も、生きた心は少しも無い、一心不亂に金刀比羅宮の御名を唱へるもあれば、心經を誦する者もある、何の顏も、血の色のあるのは無かつた、處が黒住先生ばかりは、舟の中に沈と坐つて、顏の色一ッお變えなされぬ、其處で舟夫が側へ寄つて、もし先生樣、此の荒ではとても協ひませぬ、私も爲るだげの事はし

て一生懸命に働いても見ましたが、斯うなつてはもう協ひませぬ、お覺悟をなされませ、もう此までござります、と泣きたさうな聲で云つた、すると先生は夢から覺めたやうに吻として、皆の衆さぞ御難義、然し御心配なされますな、今此の涙風を鎭めて進だるとお云ひなされ、もし何うでござりますすぐ手水をお遣ひなされて、日の神を拜まうとなさせられるが、天は墨を流したやうに暗うござります、其處で御祓を三遍までお上げなされて、徐かに墨汁を取り出し、懷紙の上へ、此のお歌をお書きなされて、さつと海中へお沈め爲さると、お歌の德は高大なものでございます、目に見えぬ鬼神も感じます、さしもの大荒が見る〳〵中に鎭つて、暗夜のやうに暗黑な空合から、お日さまの影がさした、中には難船したのもあつたやうでございます、水の藻屑と失せ果てた人もあつたやうでございます、けれど黒住先生のお乘りなされた船ばかりは、無事に岡山の湊へ着いて、荷物一個流した者ございませぬ、世の中に何が有難いと云ふて、生神樣ほど有難いお方ございませぬ、黒住先生のお歌が無かつたら、彼の上何れほどの死人があつたか分りませぬ」

定三郎は此處に初めて黒住左京の名を聞いて、頭の上に赫々たる日の神臨照したまふを覺ゆるほどと有難かりき、その身が海底より浮み上りて、波上三尺を飛び上りしも、恐しき大風一時に收つて、黒雲の間に日の光りを拜みたるも、皆な黒住先生の御蔭なりき、知らず〳〵の間に、天照大神の御德に浴して、危き一命を助かりたるなり、役人は斯くとも知らず、われを切支丹宗門の者として長く牢獄に繫ぎたるならん、是れ然しながら、天われを導きて、黒住先生の御道に入れさせたまふなり、此處に髮を理め、髭を剃り、思はず身心を淸めたるも、今より黒住先生の膝下に走りて、天地自然の敎を聞けと命じたまふなり、一寸の躊躇を許さず、一刻の猶豫も許さず、今より今村へ駈け行きて、先生に拜謁せん

定三郎は斯くして長く左京の門人となりぬ、

(四)

黒住敎徒は今も此の歌を紙に認めて、懷中深く收め、水上の禁厭とする者多く、又た此の歌の威力に由つて、免れ難き水難を免れたる例多し、此の歌には左京一代の熱誠籠りぬ、天照大神の威德籠りぬ、如何もして海波に惱める人々を助けて、神の稜威を示さんとする火の如き同情籠りぬ、故に百年を經たる今日までも、靈驗目らに見えて、不朽の權威を示せるなり、

伯耆倉吉の近在福田村に藤本源四郎といふかありき、黒住敎の篤信者なり

明治二十六年と覺ゆ、土地は大水害ありて、福田村へも浸水しぬ、魔の心とも見ゆる濁水は、滔々として床を襲ひぬ、緣の下は泥海と化し終りぬ、

村人は皆な高き山の上に難を避けぬ、源四郎の家族も又悉く山上に避難したれど、源四郎は信念鐵の如く堅かりき、左京の歌の德に感ずる者は、如何なる洪水も災すること能ふまじと信じて、下男と二人、空屋の如き家に殘りぬ、

水は刻々に增し來る、雨は次第は降り募る、助けを呼ぶ人々の聲は、物凄

き音を傳へて、凄じき水聲と共に襲ひ來る、されど源四郎は泰然たりき、

「且那樣もう可けませぬ、あれをお聞きなされませ、門長屋の廂が落ちるやうでございます、がら〳〵と音がします」

下男は恐しさに堪えざるが如く云ひぬ、源四郎は尙動かざりき、

「お前は何處へでも行け、私はどんな水にも溺れぬ」

下男は床の上へ水の上りたる時、堪えかねて遁げ去りぬ、後は源四郎のみとなりぬ、

源四郎の懷には、左京の歌を認めたる白紙抱かれてあり、床の上も水となりて、今は其處に居るべくもなければ、石炭の箱を幾個も積みて、その上に靜坐しつゝ、一心に御秡を奏し居たり、

然も水は次第に加はりて、床上四尺餘に及びぬ、源四郎は石炭箱の上に坐りて、神前に相對しぬ、家の周圍は高く丘の如くなりて、源四郎の坐り居れる座敷凹みたるやうになり居れど、水はさの多からざりき、源四郎は御秡を奏しては、歌を讀み、歌を讀みては御秡を奏するほどに、水何時しか退きて、

幾個の神燈ちろ〳〵と點り居れり、

如何に歌の威力とは云へ、滔々たる洪水が、源四郎の家のみ避けて流るゝ謂れあるまじ、と人々怪みて取調で見たるに、源四郎の家の背後にある森へ、何處より流れ來りしか、二抱えもあるべき大木かゝりて、忽ちに水をせきたるが爲め、源四郎の家に打ち付くべき水勢堤防方面へ走り、危く流失の大難を救はれたるにてありき、

(五)

弘化三年三月十八日の事なりき、左京は岡山玉井宮に於て講釋の席を開きぬ、此時多くの聽衆を見廻して、

「此方は昨夜不思議な靈夢を見た、まことに不思議な靈夢である、お聞きなされ、その夢の中に、天照太神現はれ給ひて、御聲朗かに、近い中に天下擾亂すべき事あらん、その時汝、これをもて擾亂を鎭めよと宜はせられて、駿足の馬一頭と、槍一筋とを下し置かれた、此方は辱さにすぐ御受けして、

その御馬に打跨り、勢ひ好く一鞭加へたるよと思ふ間に夢は覺めた、されどその御聲は今も歴々耳底に殘るがのう、今にも馬に跨り槍を提げて、天下の擾亂に赴く時が來やうかのう」と、云ひぬ、

聽衆は何んの心も付かざりしか、此れ豈に幕末の擾亂を暗示せる靈夢にあらずや、左京は詞をつゞけて

「それで此方は一心に天照大神の御開運をお祈り致したがのう、何う云ふ時にも、天照大神の御運がお開き遊ばしさへすれば、天下は太平でござるからのう」と、云ひ足しぬ、

天下擾亂の期近しと聞きて、一心に天照大神の開運を祈りし心、自らに意義あり、神を信じ、上を敬ふこと最も深き左京が、やかて來るべき一大事の暗示を受けて、いよ〳〵天照大神の開運を祈念せるは、例なき奇蹟にならずや、左京の精神天の高きに到達せる爲めならずや、

春はやゝ老ひたれど、玉井の宮に一もとの櫻は咲きぬ、雲と紛ふまでに咲き盛れる花の上を、輝々たる春の日は照りぬ、

(五)

左京は深く天照天神を信するに由つて、何人か德高き人に、御神號の揮毫を乞ひ得んと樂み居たりき、されど左京の知れる限りにては、此ぞと思ふ人無かりき、假初にも御神號の揮毫を乞ひて、家の寶を爲べき適當の人無かりき、

されば心に其事を思ひながら、尙望みを果さでありしに、ある日、自ら神前の掃除せんとて、神饌など取り除けつゝ不圖見れば、唐紙半切に認めたる御神號一枚、神前の角より出でぬ、然も從來見覺えなき物なりき、

「遂に見馴れぬ、斯樣な物ある筈はない、參詣の人でも忘れて行つたのではないか喃」

斯く思ひて、幾度も披き見るに、墨色淋漓として、筆勢宛らに活けるが如く、崇高の念自らに迫り來る、左京は最と有難く思ひたれど、持主の定かならぬを、納の置くは心ならず、信者親戚一門の人に問ひ訊ねたれど、一人と

して見知りたるはあらざりき。

「何とも不思議ぢや、普通の書御でもない、畏れ多くも天照大神の御神號を記せしが、此の邊りに落ち散つてある例知らぬ、五明樓呑計は易の達人ぢや、此理由を物語つて、占はせ下さらぬか喃」

小野新兵衛の來りし時、左京は始終を打開け云ひぬ、新兵衛は心得て御神號を白紙に封じ、大切に懐中して、呑計の家へ駈け付けぬ、呑計は謹んで爻を立てゝ、さて云ふやう、

「新兵衛どの、お歡びなされ、此れは尊い神のお蔭ぢや、此の封の中には天照大神の御神號が入つて居やう」と、沈着きたる樣にて云ふ、新兵衛は呑計の爻のよく適中せるに驚きながら、

「眞個にさうぢや、よくお中てなされた、さらばその御神號の持主は誰でござる、又たこの御神號を書いた人は何人でござる、ちと不審な事ぢやるで、序にお尋ね申し上げる」と、疊みかけて問ひぬ、呑計は考えて、

「其處が不思議、此の御神號に持主は無い、強て云へば神樣からお授けな

されたも同樣ぢや、書き人は人間ではない、私の爻に出た所では、神樣の御手づから書かせたまふた物かとも見える、申すも畏れある事ながら、一口に云ふと、天照大神が御書き遊ばされて、信心堅固な者へ遣はされたとも云はるべきか、まづ待たれ、更にトつて進じ申さう」

呑計は目を瞑ぢて、思案に沈むこと暫時なりしが、やがて笑を含みて、

「御神號など申す物は、第一德のある方へ集る、少くも天照大神と同じ程の魂を持つたものでないと、その惠みに預ることが能きぬ、由つて私の察する處では、此の御神號、黒住家から出た品あらう、黒住殿は大聖人同樣の德を持つて在らせられる、その德のある處、自然に御神號の集りを見させられる、此ばかりでは無い、此上まだ幾枚か手に入るかも知れぬ、

呑計は掌を指すが如くに云ひぬ、新兵衛は今更ならぬ有難さの身に滲むを覺えて、

「すると此の御神號は神樣から黒住先生へお下げ遊ばしたのでござりまするな」と、改め問ひぬ、

「まづさうぢや、その証據には此の御神號の持主あるまい、早々御表具をなされ、お家の寶に爲り申さう」と、呑計の返答は明白なり、

新兵衛は歡び勇みて飯り來りぬ、

「御心配要りませぬ、この御神號は御當家の物でございます、早速表具屋へお遣しなされませ、神樣から御當家へお遣しなされた物でございます」

左京は呑計の卜筮を信ずること深かりき、新兵衛の報告を聞きて、歡ぶこと限りなく、表具屋を招き寄せて、彼の御神號の表裝を賴みたるに、表具屋は一目見て驚き、

「世にも不思議な事がございます、此の御神號も尊いお筆の樣に拜見致しますするが、私方にもこれと同樣の御神號を持て居ります、御當家樣では何れからお買ひ求めにならせられたのでございます」と、問ひぬ、

左京は御神號出現の理由を詳しく語りて、

「此方は斯ういふ理由でお授けを得た、お前さまはどうしてお持ち爲さるか哺」

「それが不思議でございます、私方でも以前からは持ちませぬが、何處から預つたのでもございませぬ、只何時からとも知れず、納戸の中へ入つて居ります、お花主樣へは軒別にお目に掛け、隨分調べたのでございますが、一向に分りませぬ、然し私共のやうな者が、御神號を持つて居るは、畏れ多うもございます、御當家さまで御一所にお祀り下さりませぬか、されば天照大神樣もさぞ御滿足であらうと存じます」

「結構なことぢや、御神號二福集まるとは、願ふても無い事ぢや、早速迎え參らすお供して下さい」

左京は懷しき友に遭ひたる心地して、二福とも表裝させ、我家に迎えて、一心に奉祀せる中、同じやうの御神號九福まで集りて、神前の氣高き、一段の光を見ぬ、左京の德御神號を招けるなり、御神號の德左京の心に輝くなり、

第十一章　一心不動

（一）

左京は天命直受を得たる後、一心不動の誓ひを立てぬ、人間の身に心ほど大切なる物なし、心は神より下されたる物、心は天道より授けられたる物、少しにても身体髪膚を傷くるが、不孝の第一なる如く、少しにても心を亂し動かすことあれば、不敬不禮此上なし、と信ずるに由つて、一心不動の修業に肝膽を鍛ひたりき、今村宮に千日の參籠を終りたるも、三伏の炎天に、旭河原の燒け付く如き處に坐りて、大祓を上げたるも、皆な心膽を錬る爲めなりき、

されば左京の魂は鐵の如く堅かりき、泰山の如く動かざりき、谷間を走る水の如く澄みたりき、

ある時備前赤阪郡の山奥へ招待せられて、講釋に行きたる事ありき、折から雨後の水濁りて、谷間の川に濁水滔々と岸を嚙みて流れぬ、箭の如く落し

來りて、岩に激し、堤に打たれ、どう〳〵と鳴る響き、物凄きまでに聞こゐぬ、左京は危き獨木橋を渡りて、半まで來かゝりし時、不圖下を見れば高さ二丈餘もあるべし、水勢の恐しさ、身の毛も彌立つばかりなりしが、左京は心を動かさず、更に歩を進めんとせし一刹那、前に渡りたる人、刎ねるが如く飛び降りし機會に、丸木橋の端ぴんと刎ねて、ゆら〳〵と搖ぎたり、流石の左京も此時は驚きて、思はずも胸を冷しぬ、ハッと思ふ心の底波立ちて、暫時は動機鎮らざりき、

「濟まぬ事でござりました、恐れながら一寸取外しました、獨木橋の端の動いたに喫驚して、大切な魂を動かしました、一生涯取返しの付かぬ損をしました」

橋を渡り終ると共に、天照大神へ詫したりき、

此時の不覺はよく〳〵腸に滲み居たりと見ゆ、後々講釋の席に着くごとに

「此方は彼の橋の上で魂を動かしたがのう、まことに神樣へ濟まぬことをしたが喃、人間も一寸した事に驚いて、魂を動かすやうでは埒明かぬが喃」

と、語り聞かせぬ、いく子は聞き難ねて、
「あなた何時も同じ御講釋をなされます、同じ事を幾度も聞くは、餘り面白い者ぢやござりませぬ」と、注意しぬ、されど左京は笑ふのみなりき、
「そなたはさうお云ひぢやが、幾度遣つても復習講釋になつて好いものぢや、多くの門人衆の中には、初めての人もござるわのう」とて、その後も繰返し〳〵云ひぬ、

（二）

嘉永元年十月八日、いく子の病漸う革まりて、親戚緣者、涙ながら枕頭に寄り集まる、庭の菊の香霜に痩せて、夕陽鈍く緣側に昇り來る、壁の裾に蟋蟀の音も絶ゑ、次の間の土瓶に藥の香りも失せて、一座は只冷かに、一座は只濕りて見ゐぬ、
今は神の力にも及ばざりき、身体は枯木の如くになりて、魂のみ誠に活くる「お母さま、お藥をお喫りなされませ」と、左右より心細く云ふを、いく

子は耳に聞きながら、答する力も拔けて、力無く点頭くのみなりき、
左京は神前に平伏して、一心に妻の病氣平癒を祈りぬ、幾幅の御神號は燭々とせる神燈に照らされて、眞心から捧げし海の物山の物の一個々々に光りを持つ、されどいく子の生命に、その光りの幾分を頒つべき氣色はなかりき、一朶白芙蓉、夕の露に傷られて、暮れ行く秋風の冷々せるに堪ゑ難き姿なりき、
「お父樣、お父樣」と、さの子は悲し氣に呼び掛けて「あアお母樣が……あアお母樣が……」
今にも引き入れらるゝやうに叫び云ふ聲を聞きつゝ、左京は尙天照大神を祈りてありき、限りなき心の誠を拔きて、今一度の快癒を祈願するなり、然もいく子の身体よりは一息ごとに生氣放れ行く、髮の毛の一筋づゝに、死の影は浮び來る、
「お父さま、あアお父樣……」
その年六月二十日出生せる宗篤を懷にせる嫁の梶女は、迸る涙の下より叫

ぶ、左京は一心不亂なりき、如何にもして一度の快復を祈らんとする熱誠に聲も嗄れつゝ、御祓を奏し居れりき、

「先生、先生」と、一人の門人は駈け來りて「今奥樣お引き取りでござりました」と、告げぬ、

同時に「あッ」と、泣く人々の聲聞こゑぬ、

左京は聞くと共に、忽ちその塲へ氣絶しぬ、悲しみに息を閉ぢられたるなり、人々涙の中に寄り集りて、眞心ある介抱至らぬ隈ぞなき、

左京は漸くに生氣付きて、徐かに人々を見返りながら、

「さて是非ない、げびを出いたのう」と、云ひぬ、

「げびを出いた」とは失策をしたとの意、驚きに打たれて、心を動かしたるは、取り返し付くまじき失敗と、耻ぢ悔み云ひたるなりき、

天命直受を得たる後、左京が心を動かしたるは、只此の二度に過ぎざりき、

(三)

左京は人の靈魂を呻の御物として、何よりも大切に取り扱ひき、されば總てを陽氣にして、世の中に心配の根を絶たんとしぬ、曲りたる事をせねば、苦勞も心配も冒し來ることなし、一心に神に任せて、あはうにさへ爲りてあれば、自らに陽氣に、自らに活氣を得て、樂しく面白く愉快に暮らし、得ん、

左京は常に斯く信じて、他にも心配させまじく努めぬ、己れの魂を大切にするのみならず、他人の魂をも大切にしぬ、美しき心に世の中の魂を包みて、柔き手に捧げ持たんと云ふが、左京平生の願ひなりき、

いく子まだ世に在りし時、その邊りに住む山伏二人訪ね來りて、左京の行ふ禁厭の法を詰りぬ、山伏修驗者は、迷信深き愚夫愚婦に取り入り、祈禱、禁厭、魔除の法などを修して、世を渡り行くなれば、左京が雜り氣無き禁厭に由りて、如何な病苦をも拭ふが如く全快させるを見ては、やがて道の衰へなり、やがて生活の大事なり、左京の唱うる天地自然の道開け行くに從ひて、修驗道は日に衰へん、これ彼等の忍ぶ能はざる處「假し日頃の辨巧と、日頃鍛錬せる法力とに由りて、彼の黒住を退治し呉れん」と、敦圍荒く來れるな

り、左京を一言の下に云ひ伏せて、再び起つこと能はざるまでに、手痛き打撃を加へんと覺悟せるなり、

されど左京は少しだも抵抗せざりき、山伏が詞荒く詰責するやうに云ふを聞きつゝ、左京は沈着いて、

「爾うでござるかのう、爾うでござるかのう」と、同じ事を繰返すのみなりき、如何に鋭く責めかけても、只「爾うでござるかのう、さうでござるかのう」と、答うる外、一言だも爭論せざりき、

流石の山伏も相手なき喧嘩に花を咲かせんやうなくて皈り行きぬ、いく子は双方の樣子を次の間より聞き居たるが、山伏の立ち去るを待ちて、良人の側へ進み出で、

「あなた何うなされたのでございます、お次の間から承はると、山伏が口穢く惡口しても、爾うでございます〳〵、とお云ひ遊ばした、何故もう少し道を聞かせなされませぬ、彼では山伏が勝利を得たとより思はれませぬ」と悔しげなりき、

左京は滿面に笑を含みながら、意氣揚々として田圃道を皈り行く山伏のうしろ姿を見送つて、

「あの人の勇しいさまを見やいの、勝ち誇つた軍人のやうに歡んで皈られる、もし私があの人の云ふ事に難を打つて見さつしやれ、彼の人達が靈魂を動かす、私はそれが不憫さうでござるでのう、彼して歡んで皈るのを見ると、私は嬉しうて堪ねられぬがのう、此方の道を說く爲めに、彼の人の靈魂を動かしては、神樣へ申し譯けが無いでのう」

左京の心には絕ねず春風吹き滿ち、絕ねず美しき花綻び居たりき、

第十二章　逸話

（一）

岡山近在に古松村とて貧民のみ住居せる一部落ありき、村民中に庄屋となるべき者なければ、必要の場合には、隣村より頼み來りて、一村の束ねを托する事少からざりき、されど他村より手を伸ばして、難治の貧村を治め行くは、靴を隔てゝ痒きを搔く思ひ深し、曲みなりにても、村内にて然るべき人を得たしとは、心ある者皆な一向に願へる所なり、

當時の制は、大庄屋の下に庄屋あり、大庄屋は數村を統治し、庄屋は一村を治め行く、大庄屋は今の小なる郡長の如く、庄屋はその下に屬する村長の如し、古松村を支配せる大庄屋は長瀨岩太郎とて、黒住教の信者なりき、

「この有樣では困る、村に庄屋無くては、人間に頭が無いと同じ、手足ばかりで世は渡れぬ、黒住先生は何事にも心切なお世話を下さる、古松村の庄屋も、黒住先生のお口添を得ば、或は直ちに好い人を得るかも知れじ」と、

思ひ付き、直ちに左京の許を尋ねて「古松村に庄屋無くて困ります、先生のお目にこれならばと御覽なされたのをお選み下さりませ、兎も角その人へ白羽の箭を立てて見ます」と、云ひぬ、

左京は委細を領して、村内の然るべき人を庄屋に推薦しき、何が黒住先生の御口添なれば、その御德に由りても、難治の一村、日の御光りを拜む時あらんと、人々歡び噂し合へりき、

然もその年の暮に至りて、庄屋は年金の取立を始めたれど、甲斐なかりき、何れの家へ小使をさし立てゝも「金策爲きず、」とて、斷る者のみ、大三十日は前に横はる、村人は寒く蒼い顏を垂頭れて駈け廻るのみ、早や明日一日間際になりても、庄屋の錢箱は空なりき、

大庄屋よりは日ごとに催促の使者來る、初めのほどは今日明日と延ばし居たれど、早や明日に迫る今日となりては、挨拶の詞にも盡きて、

「毎度御雜作に預ります、お使ひにも空歩を踏ませて濟みませぬ、然し私は黒住先生のお口添で庄屋の役に就いて居ります、何事も黒住先生のお差圖

を受けねばなりませぬで、年金は悉皆取り纏め、昨日黒住先生のお手許へ送りました、恐縮ながら先生からお受け取り下さりませぬか」と、心にもなき僞り云ひぬ、

大庄屋の使ひは、斯くと聞きて、直ちに左京の許へ駈け行きぬ、左京は折から家にありき、

「先生へお尋ねします、御當家へ古松村の年賦金がお預け申してあるさうでございます、明日は大節季、今日中に始末がして置きたいと存じます、どうぞお渡し下さりませぬか」と、云ひ入れぬ、左京は驚きたる樣もなく考ねて

「何んぼであつたか喃」

使の者は帳面を繰り廣げて「幾許々々でございます、まことに御當家などへお手數をかけて、古松村の衆も濟まぬことでございます」と、云ひつゝ金高を示したりき、

「諾し〳〵、今拂ふて進せる」

左京は奥へ入りて、明日支拂ふべき用意の金子を悉く持ち出して、

「此處に金子が此れだけある、少々不足かも知れぬが、持つて歸つて下され、古松村から預つたのを全然忘れて、皆の衆に手數をかけました喃」

「いゝね、何う致して、年々の例、古松村の集金には、此の足を捧に致します、それが今年は先生樣のお蔭で、全然と埒が開いてございます」

大庄屋の使は幾度も禮を云ひて去りぬ、始終の樣子に不審を抱き居たるいく子は、眉を顰めながら進み出で

「あなた眞實でございまするか、眞實古松村からお金をお預りなされたのでございまするか」

「いや、私は知らぬ」

「御存じの無いお金を、何故お渡しなされました」

「古松村の庄屋が困つたのぢやわい喃、大庄屋へ辯解無さに、私の名を道具に使ふたのぢやわいのう」

左京は氣に掛けたる樣無かりき、貧しき手許にては、連城の璧にも比ぶべ

大晦日のき金子を、他の爲めに拂ひ傾けて、毫も惜しと思ふさま無かりき、又たそれにて慈悲善根を爲したるを歡び慢ずる体も無かりき、されどいく子は不平なりき、

「あなた左樣な事をなされて、明日は年の大節季でございます、只今お渡し遊ばしたのは、年の金でございます、年の金は人の胸へ響きます、血の色を帶んで居ります、小供達へ一足の履物も買ふて遣らねば爲りませぬ、出入の商人へ小拂ひもせねばなりませぬ」

「いや、履物などは何うでも宜しい、小拂ひも理由を云へば待て呉れる、一たん渡した物を取り返すことは能きぬわいの」

斯〻てもいく子の機嫌惡かりき、左京は暫時して

「お前も黑住の家内ぢや無いかの、何時までもそんな事を思ふものぢやござらぬ、それに就いて思ひ出したことがある、序に話して進せう、ある處の金持ちが、知合の和尚に座敷を貸した、處が其處に年頃の娘があつて、その和尚と懇意にする、親達は相手が出家、間違はあるまいと安心して居た處、

その娘が子を孕んだ、主人も家内も殊の外腹立、そんな和尚に座敷を貸して置くことはならぬと云ふて、すぐ逐ひ出し、娘には產をさせた、けれどお寺の子は穢いと云ふて忌み物も洗はず、赤兒にも行水させず、生れるとすぐ和尚の寺へ持つて行つた、和尚は默つて受け取つて、貧苦の中に子を育てる、貧乏で仕方が無いから、毎日近所で托鉢して、人々の慈悲に縋る、それが一たん追ひ出された金持の家へも行くのぢや、平氣で、經を讀んだりして……」

「御出家にも似合はぬ人でございますなあ」

「まア聞かつしやれ、處が其處の家では、大事の娘を瑕物にした和尚さん、�ぜん一文遣ることではないと、何時も口穢く云ひ罵る、けれど和尚は氣にも止めず、毎日のやうに遣つて來る、するとその中に其處の娘が又子を孕んだ」

「不思議な事でございますなあ」

「それが喃、調べて見ると、家に使つて居る番頭の胤であつたさうぢや、前に和尚へ押し付けた小供も、段々詮議して見ると、やはり番頭の子であつたと知れた、其處で主人が肝を潰して、早速和尚の處へ詫びに行くと、その

和尚の云ふ事には、いや御心配なさるな、この子は、私が前世で甚い世話になつて居るで、その恩報じに育てます、誰方のお子でもそんな事に頓着はござらぬと答へたさうな、佛に事へる出家でさへ、それほどの修業はあるに、有難い天照大神のお宿をする當家の者が、古松村の金の事位ありさうなものぢやござらぬか喃」

いく子は轄然として悟りて、再び金子の事を云はざりき、節季の小拂は体好く斷つて、良人の德を傷けじと努めたりき、

（二）

左京平生に曰く何事にても、只見るな、只聞くな、造次にも、顚沛にも、心に油斷があつてはならぬ、惡人の云ふ事でも、自然爲めになる事がある、乞丐の云ふ事にも自然の天命が籠つて居ると、故に左京は誰に對しても平等なりき、

ある時雨のそぼ降る中を、左京は高木履穿きて、ぼく〳〵と歩み行きぬ、

折から穢らしき乞丐女、襤褸の衣服を纏ひたるが、後になり前になりして行くほど、突然と聲かけて、

「お前、さま神主かな」と、問ひぬ、左京は莞爾して、

「私は神主ぢや、然も貧乏神主ぢやに由つて、轎子にも乘らず、雨の中を歩くわいの」

乞丐女はその顏を覗き込んで、

「勿体ない事お云ひなされます、雨の日でも歩けるほど健でお在で爲さるを誰樣のお蔭と思召す、皆な神樣の大恩ぢやござりませぬか」

左京ははつと心付いて、

「よう云ふて下された、一寸取り外す處であつた、禮を云ひます」

丁寧に頭を下げて別れぬ、斯る事幾度もありしならん、

（三）

左京は眞心を土台にして如何なる人にも、分隔なく交はる、然もその態度

は圓滿なりき、親切なりき、絶ねて人の厚意を無にする等のこと無かりき、
ある日「今日はちと足が疲れた」と、云ひぬ、いく子は側にありて、
「それなら三里灸をお点へなされませ、灸の効驗はすぐ見ねます」と、心付けぬ、
左京は「成程、成程、」と、云ひながら、麦を取り出で、足の三里に点へんとする時、日頃懇意にする人來りて、
「もし、今日ばかりはお止めなされませ、血忌でござります、血忌の日に灸を点ねては、神の御罰が恐しうござります」と、注告するやうに云ふ、
「はて、左様でござつたか、よく氣を付けて下された、それなら止めます」
左京は切角取り出したる麦を方付けて、四方八方の談話、道の講釋、暫時しで、その人は辭し去りぬ、左京はうしろ姿を見送り果てゝ、
「これよ、その灸を出してたもれよ」と、いく子を見返るやうにしぬ、
「それでも今日は血忌ぢやござりませぬか、血忌の日は灸を避けるものでござります」

「なにさ、血忌は今歸つたわ喃」
總ての仕方斯くの如く溫情ありき、

（四）

左京の手紙、歌、日記その他には、劃の足らぬ文字多く記せるを見る、特に、略字を用ひるにはあらず、當然あるべき文字を誤るにもあらず、如何なる物を書き居れる時にても、遠來の人ある時は直ちに筆を投じて、その人と對談を始むるが故、文字の半なるがあり、劃の足らぬのもあり、人々氣の毒がりて「私は管ひませぬ、まづお書きなされませ」と、云へば、左京は頭を掉つて「いや、餘り待たすと人の氣が滯るでのう」
左京は此の如く人の氣の凝滯するを好まざりき、今村の程近き村に、何がしとて二三度は道を聞きたる男ありき、ある日、左京を訪ねて、
「まことに卒爾なお賴みでござりまするが、日々の心得になるお歌をお遣はし下さりませぬか、と賴みぬ、」左京は直ちに承引きて

腹立てな物を苦にすな惡もすな
天の惠みで福德を增す

と同じ歌を二十枚ほど書きて與へぬ、何がしは物足らぬ面地して、

「切角ではござりまするが、同じお歌ばかりでは面白くござりませぬ、少々變つたのをお書き下さりませ」と云ひぬ、左京は笑ひて

「いや、その歌で宜しい、何の室にも、よく見ゆる處へ貼つてお置きなされ」と取合はざりき

その人推て云はんも心なければ、云はるゝまゝに持ち來りて、室々のよく見ゆる處へ貼りたるが、尙一枚剩りたりき、次の日、左京に會ひたる時

「先生お歌が一枚殘りました、お返し致しませうか」と問ひたるに、左京は客を正して

「それはあなたの臍の裏へお貼りなされ」

(五)

ある時、門人二三人を伴ひて、某家の請招に赴きたる事あり、その途中、前頭より社祢を負ひたる一人の男歩み來りぬ、門人の一人見て

「祝言の席へ呼ばれて行くやうぢや、社祢を脊負ふて居る」と、云ひ、今一人は

「いや祝言では無い、葬式に行くのぢや、彼の男の顏に曇りが見ゆる」と、云ひぬ、斯る無用の事にも意地出でゝは、兎角爭論激しくなりて、一方「祝言に違ひなし」と、云へば、一方は「葬式に相違無からん」と、云ひ、容易に落着付かざりき、然も左京は何事も聞かぬ顏に、ぼく〳〵と歩き行く、一人の門人堪ねかねて、

「先生何うでござりませう、此の結着付きませぬ」と、問ひぬ、左京は笑ひながら、

「お前方は我慢が强いのう、祝言に行くか葬式に行くか、私は彼の人に聞いて見んと分らぬがのう」と、箸めぬ、さしもの爭論一言の下に鎭りて、門人は顏を見合せぬ、

（六）

作州の信者に招かれて、只一人半田山を越ねたる時なりき、日全く暮れて、天きら〳〵星瞬く、山路の夕は人の歩も絶ねて、梢を變る風の音物淋し、左京は淡暗き道を足早やに歸り來る、木履の音木魂に響いて、凄氣頭上を壓する時、雲突く如き大男前に立ちて、

「待て」と、一聲、腰に挿したる山刀の鞘光りぬ、普通の者ならましかば、驚いて聲をも立つる處を、左京は莞爾として、

「私に用でもあるかの」と、問ひ返しぬ、

「用がありやこそ呼んだ、金が借りたい、貸して下され」

此の大男は追剝なりき、左京が此道を歸ると知りて、此處に待ち構ね居たるなりき、

「はて、金か喃、私は金を持つて居ぬが喃」

「隠居さん、秘さつしやるな、私はちやんと知つて居る、作州から講釋の

禮を貰ふてござらう、それが借りたい」

「お前、よう知つて居る、如何さま禮に貰ふた封金は持つて居る、それなら進せう、待たつしやれ」と、懷中せる一封を出して渡しぬ、追剝は受け取りて中を改めたるが、

「たつた五両か、私はまだ有ると思ふて居た」

「お前それでは不足かの」

「も少し足らぬ、もう五両足らぬ」

「はて、困つた、お前金に究つたことあるぢやの」

「今夜の中に、拾両無くては、命に關はることござります、私もこんな事をしたいのぢやござりませぬが、脊に腹は替ねられず、御隠居樣に御無心を云ふたのでござります、然し五両では仕樣がない、私の命數は盡きたと見ゆる」

惡人にも失望ありき、大の男が五両の金を見詰めたるまゝ、身動きだもせず立ち縮みぬ、左京は此の樣を見て、惻隱の情むら〳〵起りぬ、

「これ、短氣を起しては爲りませぬ、金は何の樣にでもなるが、命はたつた一つ天道から下されて居るばかりぢや、無用に捨てゝはならぬ、よいかお分りか」

「それでも金が無くては生きられませぬ、金の無いのは首の無いにも劣ります」

「好い事を敎へて進せる、それほど困るなら、私の家へお起しなされ」

「隱居さんのお宅へ……」と、追剝は惘れた顏をして「爲りませぬ、爲りませぬ、そんな事はなりませぬ、いくら追剝でも、お宅へお金を頂きには參られませぬ」

「家内に顏が合されぬか、其處もござらう、では今村宮の手水鉢の下に埋めて置く、私も貧乏神主で、金と云ふては無い身ぢやが、命に管はる程の事は無い、五両でも三両でも、融通のつくだけ埋めて置く、目標は小石、明日の朝取りにお出でのう」

「有難うございます、あなたは今村宮の神主さま、お詞に甘へて參ります」

追剝は感謝するやうに云ひたれど、左樣の詞を信じ居れりとも見ねざりき、左京は歸りて追剝に約束したる如く金子五両を紙に包み、お宮の手水鉢の側に埋めて、目標の小石鮮かに、やがて神前に稽きて、彼の不幸なる惡人の爲めに、御祓一卷を參らせて、心靜かに寐に就きぬ、

翌日は天晴れて、朝の風そよ〳〵吹く、左京は例の如く早く起き出で、東の天漸う明けかゝる時、門前へ立ち出でたるに、昨夜の追剝、前の小川の緣に平伏して、

「お恕し下さりませ、私の大罪をお許し下されませ」と、涙ながらに云ひ居たり、左京は進み寄つて、

「お前さん、昨夜の追剝どのぢやないか」

「人間ぢやございませぬ、畜生でございます、私は疑ひ〳〵來ました、隱居さんは心切に仰せ下されても、まさか夫ほどの事はあるまい、まさか手水鉢の下に金子をお埋め爲さる御心切はあるまいと思ひながら、金が無くては命のない難義の瀨戸ございまするで、今朝明けぬ間に、そつと來て見まする

と、目標の小石もございます、手水鉢の下に五両のお金もございます、私はそのお金を手に受けた時、今までの惡事が恐しうなりました、暗い〳〵胸の底に、お日さまの光りがさしました、お弟子にして下さりませ、これから眞人間になつて、今までの大罪を償ひます」

「よう氣が付かれたの、まづ神さまへ參りなされ、眞人間の踏む道を案内してお上げ申さう」

左京は前に立ちて、お宮の境内へ進み入りぬ、

此の追剝にも、朝日は美しう照りたりき、

(七)

修驗者山伏の類が、左京を道の邪魔者として、常に敵對行爲を取り居たるは、前にも記しぬ、左京ある日早く起き出で、不圖家根裏を仰ぎ見たるに、七ヶ所までも黑く焦げ居たり、不思議に思ひて、家人にも告げ、宗信をも呼び來りて、家の棟を檢め見たるに、燃ね殘りの松明其處此處に落ち散りて、

放火の痕歷然たり、心早き下男等は、村會所へ屆け出でんなど犇き云ふを、左京は穩かに止めて、

「いや〳〵 罪人を作るに及ばぬ、何の意趣意恨あつて、私の家へ火を放けやうとしたか、夫は知らぬが數ある罪科の中でも、放火は最も大罪に數へられる、將來が不憫さうぢや、どうかして本心に返らせたい、此のまゝにして置かしやれの」

「それでも憎い奴でございます、捨て置いては此後の見せしめになりませぬ」

「まア好いわいの、今に眞人間にして遣るわ喃」

左京は燒け殘りの松明を神前に供へて、放火者の爲めに、開運を祈禱すること六七日に及びき、

「御免なされませ、一寸お願ひ申します」

黑住家の門前に匍匐ひて、頻りに内をさし覗く年若き男ありき、折から庭前の掃除を爲し居たる銀次兵衛は徐かに竹箒を止めて、彼の若者を頭から見

下しつゝ

「お前は誰ぢや、何處からお來でなされた」と温みのある聲にて問ひぬ、

「惡人でございます、人間の皮を着た畜生でございます」

「これ〳〵」と、銀次兵衛は叱るやうに「此方は黒住先生のお住居ぢや、神様のお宿ぢや、畜生などの來る處でない」

「御有理でございます、然し……」と、彼の男は蒼ざめた顔を擡げて、銀次兵衛を沈と見入りぬ「……然し、お禮申さでは爲りませぬ、お詫び申さねば爲りませぬ、先生様はお宅でございますか」

「先生はお宅ぢや、然し畜生から詫をお受け爲さるお方でない、私が取次ぐ、云ふて見さつしやい」

「外ではございませぬ、恰ど二十日ほど前の事、此の手でお屋敷の屋根へ火を放けました、この足で勿体ないお屋敷の家の棟を踏みました」

「お前さんか……恐しい放火したのは……」

「私でございます、此の畜生でございます」と、云ひかけて平伏しぬ、

銀次兵衛は驚き顔に、壯年をしげ〳〵見詰めぬ、

「全体お前は何者ぢや」

「修驗者でございます、備中笠岡在に住む修驗者でございます、黒住先生の敎が、どれ程私共家業の邪魔になるかは、此處に改めて申し上げるまでございませぬ、黒黒先生のお道が弘まつては、私共修驗者飢死を致す外ございませぬ」

「そんな筈はない、黒住先生は正直な人の家業をお妨げなされぬ」

「勿論でございます、勿論正直ぢやございませぬ、私共修驗者は先生の御繁昌を妬んで居ります、お道の廣まるのを嫉んで居ります、その爲めに惡心を起します、私が恐しい放火の大罪を犯したのも、全くその爲でございます」

「それで分つた、ぢやが修驗者どの、神様のお宿は燒けぬ、思ひ知られたか喃」

「思ひ知りました、此の手で松明を何本燒いたか知れませぬ、けれど眞の屋根裏を焦したばかりで、一向に火が点きませぬ、彼是して居ります中に、

下しつゝ

「お前は誰ぢや、何處からお來でなされた」と温みのある聲にて問ひぬ。

「惡人でござります、人間の皮を着た畜生でござります」

「これ〳〵」と、銀次兵衛は叱るやうに「此方は黒住先生のお住居ぢや、神様のお宿ぢや、畜生などの來る處でない」

「御有理でござります、然し……」と、彼の男は蒼ざめた顔を擡げて、銀次兵衛を沈と見入りぬ「……然し、お禮申さでは爲りませぬ、お詫び申さねば爲りませぬ、先生様はお宅でござりまするか」

「先生はお宅ぢや、然し畜生から詫をお受け爲さるお方でない、私が取次ぐ、云ふて見さつしやい」

「外ではござりませぬ、恰と二十日ほど前の事、此の手でお屋敷の屋根へ火を放けました、この足で勿体ないお屋敷の家の棟を踏みました」

「お前さんか……恐しい放火したのは……」

「私でござります、此の畜生でござります」と、云ひかけて平伏しぬ、

銀次兵衛は驚き顔に、壯年をしげ〳〵見詰めぬ、

「全体お前は何者ぢや」

「修驗者でござります、備中笠岡在に住む修驗者でござります、黒住先生の敎が、どれ程私共家業の邪魔になるかは、此處に改めて申し上げるまでござりませぬ、黒黒先生のお道が弘まつては、私共修驗者飢死を致す外ござりませぬ」

「そんな筈はない、黒住先生は正直な人の家業をお妨げなされぬ」

「勿論でござります、勿論正直ぢやござりませぬ、私共修驗者は先生の御繁昌を妬んで居ります、お道の廣まるのを嫉んで居ります、その爲めに惡心を起します、私が恐しい放火の大罪を犯したのも、全くその爲でござります」

「それで分つた、ぢやが修驗者どの、神様のお宿は燒けぬ、思ひ知られたか喃」

「思ひ知りました、此の手で松明を何本燒いたか知れませぬ、けれど眞の屋根裏を焦したばかりで、一向に火が点きませぬ、彼是して居ります中に、

ほの〳〵と天は明ける、見咎められてはならぬと思つて、その儘逃げて歸りました、最も誰一人、私の所業を知つた人はござりませぬ、此まゝ遁れ果せることも能きぬではござりませぬが、悲しい事には私の心が知つて居ります、私の心が身を責めます、神樣のやうな黒住先生に難義をかけて、知らぬ顏で居ては濟まぬ、早う名乘つて出、早う名乘つて出、と叱ります、その叱責に堪にかねて、お屋敷の前に耻辱を曝らします、私を御存分になされませ、私を何處へでも突き出して下さりませ、さうすれば私の罪が消へます、畜生から人間に復る事が處きます」

云ふ中にハラ〳〵と涙を流しぬ、銀次兵衛は壯き修驗者の心の底に、清き懺悔の漲るを見て、其事を左京の耳に入れぬ、左京は直ちに修驗者を座へ引いて、彼が悔悟の樣を見、彼が悔悟の聲を聞き、更に天地の道を說き聞かせぬ、修驗者はいよ〳〵感じ、

「私を御門人になされ下さりませ、一生懸命にお道を奉ずるでござります」

左京の門弟子には斯る人多くありき、

(八)

左京の禁厭に由り、左京の陽氣に滿ちたる呼吸に賴りて、不治の大患立ち所に全癒せし例數うるに遑なし、左京が天照大神と一つ心になれば、生き通し丸助けなりと絕叫して、諸人の病苦を助けたる實例は福田某が三たび九死一生の難に落ちて、三たび全快の歡びを見たる時、左京手づから事の顚末を書き付けたる文書あり、曰く、

福田主重き病ひにふし給ふこと年々にしてすでに三度まで身まからんとし給ふ時つたなくも我天津神國つかみを深く祈り奉りければ不思議に快くなり給ふ有がたさの餘りにかくはべりぬ、

三度までいき歸りたる人はまた
からてんしくと我朝になし

と口すさみ悅びのこゝろやむときなきにまたことし秋の末より先のとしのごとく打ふし給ひ日にまし重り給ひいたはしさ見るに忍びす時

天照大神と主の心と一つに成り給へば生とふしなりと申さとせば有がたし
と請ひき給ふやいなやその病苦を忘れ給ひ夫より一日二日とひをふるまゝ
快よく成り給ふ有がたさにかくぞ侍る

天てらす神の御心人こゝろ
ひとつになればいきとふしなり

時に文政十三年庚とら霜月下旬

藤原宗忠

左京は天照大神の神德を弘むるをもて任としぬ、天照大神を天地の親神と
して、一圖にその德に近づかんとしぬ、已を天照大神の分身として、純無垢
の眞を運びぬ、故に天照大神の神德を詠み出でたる道歌最も多し、

天てらす神の御内に住みながら、我と魔道へおつる憐れさ
天てらす神の御心人こゝろひとつになれば生き通しなり
天てらす神の御とくに惡はさり、よろずの善は心にぞ有
天てらす神の御德のまさるとし、ゆく末長く子こそつよかれ

天てらす神の御德を知る時は寢てもさめても有難きかな
天てらす神の御德を世の人にのこらず早く知らせたきもの
天てらす神の御腹に住む人はねてもさめても面白きかな
天てらす神の宮居に住む人はかぎり知られぬ命なるらん
天てらす神諸ともに行く人は日ごと〳〵に有難きかな
天てらす君の光りは千早振る、かみ世も今も變ざらまし

講釋の席に坐る時、まづ「天照大神の仰せなるぞ」と、喝破すること屢次
ありき、純無垢の眞心はやがて天照大神の大御心なりと信ずる彼は、天照大
神の心をもて、多くの門弟子に對し、世間に對し、神に對し、やがて斯くし
て一生涯を終始せるなり、故にその云ふ所力あり、その行ふ所活氣あり、

(九)

「御覽の通りの寒村でござります、切角御請待申しながら、何一つ御馳走
申すことも能きませぬ、どうぞお宥し下さりませ」

主人は淋し氣に祀れる神棚を見返りて云ひぬ、左京は一席の講釋を終りて、澁茶に咽喉を濕したる時なりき、

「いや〳〵、御心配は御無用になされ、神樣は只人の篤い志を歡ばせ給ふ、如何に神酒神饌を結搆にしても、主人の心が腐つて居ては何にもならぬ、お前さまも勇しいお道にお入りなされた、すれば心に天照大神が宿らせられる、天照大神のお宿たる心を疎末にしてはならぬ、怠惰にしてはならぬ、「天照大神は早起きして家業に精を出す者がお好きぢや、一日の撓みもなく、日の神を信仰して、家内睦しく、有難く、面白く、樂しく、その日〳〵を送つて行くのがお好きぢや、神樣のお好き爲さる事を、努めてするほどの功德はない、どれほど結搆な物を捧げても、朝寢をしたり、夫婦喧嘩をしたり、家内不和で日を送るやうなものに、幸福は決して下さらぬ、況して天からお授げになつたお金を使つて、無用の遊びをする樣で、神樣のお氣に入る筈がない、貧乏人が無理算談して、神酒神饌を參らせても、神樣はお歡びなされぬ、これからお神酒でもさし上げたいと思つたら、代りに此の歌を供へなされ」

云ひつゝ筆採りてさら〳〵と認めたるは二首の道歌なりき、

家内しう中のよいのは神かぐら
高間の原で笑ふ鈴音

ありがたき又面白き樂しきの
みきを備うぞ誠なりける、

その家長く幸福なりき、長く福德圓滿なりき、

第十三章　訓誡

（一）

左京常に人に詞へて曰く、山葵おろしに山の芋が磨りかけてある、それを鼠が舐つて居る、とその中にその鼠の頭が磨れ、身体が磨れ、段々尾までが磨れたさうでございますわい」

一語深く味ふべし、誰にもよき訓誡なり、

（二）

備前濱野村に卯三郎とて黒住教の篤信者ありき、二七日の講釋には必ず來りて聽問するが故、道の修業も淺からず、時には代講をも勤むるやうに爲り居たるが、一日左京に對ひて、

「時に先生、私もお蔭樣で、お道の大体を得てございます、天照大神の御陽德を頭に戴き、一心無念にて向へば、如何な事にも成就せぬ例ございませ

ぬ、近頃思ひ付く事ございまして、水中の魚を捕るに、釣竿も用ひませぬ、網も採りませぬ、一心に天照大神の御名を唱へて、右の手をさし延べ掴むに、百發百中一度の仕損じもございませぬ、此も御陽德のお蔭でございませうかな」と、云ひぬ、

左京は卯三郎の云ふことを無言のまゝ聞き居たるが、此の時面を正して、

「そりや可かぬ喃、此方は天照大神の御德をそんな小さい事に用いぬが喃、それでは御神德を輕んじ奉るに似て好い事と云はれぬ、天照大神の御陽德を借りてすれば、どれほどの物でも掴める、小さい魚を一尾捕る暇で、何故天地の大を掴む工夫せぬ、何故天地の活氣を掴む工夫せぬ、眞の道はそんな物ぢやない、我々の掴む魚は高い空に泳いで居るぞ」

卯三郎はこの訓誡を得て、轄然と悟る處あり、やがて眞の道に入りき、

（三）

星島良平の事は前にも記しぬ、彼は幼き折讀書を好まず、習字を嫌ひ、少

しも母の訓誡を用ひざりき、母は我子の將來を案じ煩ひて、日頃より信仰する左京の許へ來り「悴には困ります、あのままに捨て置きては、末の末が思はれます、先生の御教訓にて、ちと御本に親むやうならぬものでございませうか」と、賴みぬ、左京は打案じて「お前さまは酒が嫌ひであつた、その酒を強いられたら、何の樣な心致すか喃」

「苦しいものでございます、死ぬほども嫌なものでございます」

「それ御覽じませ、嫌な物を強られるは、誰も同じ思ございるわのう、御子息は本が嫌ひぢや、手習ひが嫌ひぢや、その嫌なものをお強いなさる、それがまことに宜しくない、人は活物ぢや、まづ心をお活しなされ、心さへ活きて參れば、自然にあなたのお詞をお用ひなさる、嫌ひな酒を強られるも、嫌ひな讀書を強られるも苦しさは同じでございます」

母の宮子は左京の云ふ心をよく採りて、その後は絶ねて叱言を云はざりき、強て讀書を勸めざりき、良平が書物にても手にせるを見る時は、

「こりや優い、今日は御本を讀むと見ねる、御褒美にこれを取らせる」と、

菓子などを包んで與へ、机の前に座りでもする時は、機嫌好く側へ密りて、

「今日はお手習ひをすると見ねる、さて感心ぢや」と、同じやうに菓子など與うる中、小供心にも自ら勵み生きて、日ごと書物を讀むやうになりぬ、良平が學問に志して、遂に身を起すに至りしは此の爲めなりき、左京の訓誡に由りて、心に活を與へられたる爲めなりき、

（四）

左京曰く「人間は慢心があるが故に迷ひあり、慢心を除けば迷ひなし」又曰く「人は女の嫁入せる翌日の心持ちを忘れずば、我まゝ慢心の芽を吹く事無し」又曰く「言葉を以て人を殺すは、劍を以てするよりもその罪深し、劍は形を殺すに止まれど、詞は心までも殺す」言々皆な味ふべし、

（五）

諸門弟寄り集りて、左京の訓誡を聞き居たる或日の事なりき、左京が「慢

心は迷ひの原ぢや、まづ慢心を苅り除らずば、迷ひを去ることは爲り申さぬぞ」と、誡めぬ、座にありし鹿田何がし進みて、

「只今の御講釋を承はつて、身の幸福を歎び申す、拙者もし學問を心得てあらば、きと慢心を起してござらうを、幸ひに學問仕らぬ、從つて慢心は一向ござらぬ」と、云ひぬ、左京は色を正して、

「それが慢心でござる、學問せぬを鼻にお掛けなさるのは、取りも直さず無學自慢と申すものでござる」と、誡めぬ、傍に居たる桝屋與平深く感じ、

「私は一切慢心を起しませぬ、慢心の恐しさが骨に滲みてござります」と、云ひぬ、左京は点頭いて、

「それは結構ぢや、然し爲るべく左樣な事を口へ出してお云ひなされな、口へ出してお云ひなさるのが、やはり慢心になり申す」と、諭しぬ、

（六）

「先生、私は氣が短うてなりませぬ、どうか一生腹を立てぬ工夫ございませぬか」

ある人左京に對ひて問ひぬ、左京は側に居たる我子の佐野吉（宗信の幼名）と角力取る眞似して、

「幼ない小供に勝たせる心持ちになつてお出でなされ、決して腹の立つことござらぬ」と、答へぬ、

「然し、茶碗でも投げ付けられては、その樣にもして居られませぬ」と、問ふを、

「その時は眞綿で受ける心持ちをお忘れなさるな」と、訓へたり、

第十四章　皈幽

（二）

暗き雲は玉を裏みぬ、黒住家に凶音ついで至る、

嘉永二年六月には、前に澁川圓之進の家に嫁ぎしとめ子（前名さの子）神去り、同じ八月十二日には、日夕左京の側にありて、眞心より敎用を勤め居たる銀次兵衛死去しき、

夫等哀傷の涙まだ乾かぬに、左京は秋の末頃より心地例ならず覺ゆたる事屢次ありしが、二七の講釋を缺したる事無く、十一月十七日我家の高座に坐りて、平生よりは朗かに、又た平生よりは聲高に、多くの信者を前にして、快く講釋しき、篤信者の聞書を基として、こゝにその大要を記さん、

「各々有難き信心を以て、ようこそ御參拜下された、限り無う有難う嬉しう存ずる、此の黒住が歡ぶばかりにあらず、天照大神も又限り無う御歡ばせぢや、由て天照大神尊き御詞を放ち給ふぞ、御道は日に盛んに相成つて、ま

ことに有難く結構な事に存ずる、各々方も有難き信心を御貫きなされ、有難いこと目前に現はれ參る、先日も作州の赤木忠春に會ふて話したい事があると存じた處、その通りを赤木が夢に見たと申して、昨夜わざ〳〵參り呉れた、此れが即ち見通し聞き通しで、誠の活物となつた者は、千里を隔てゝも思ひが屆き、聲も直ぐに聞こゑ申す、身体を持つて參るよりは、至つて安く、又た至つて早い、何んと有難い事でないか、眞心に活物を得た人は、如何なことも自由自在の協はぬ人なく、天照大神の御子で、一体の活物となるが故、天照大神同樣の神業が能きる、此の塲合心の神の鏡さへ曇らねば、天地の間の活物夫々此方の八咫鏡に映るに由り、正神邪神の見極めが明かに付く、此塲合より申すと、正神は歡び、邪神は嫌かる、いよ〳〵嫌がつて天下の不爲をなす者は、眼目を殺すと直ちに死に失せる、活物の有難さはこれでも分る、各々も深く道の修業をして、誠の活物に居直りたまへ、

此方も活物を見付け、天地の活物となる修業致したれば、只今では門人も多く取り立て、昨年より目當を見極めて、一段の修業、願ふ事皆な成就致し

た、その有難さ嬉しさ限りない、最早や講釈は宗信と門人とに任せ申す故、その心得にて聞き取りたまへ、

然し此方も教導は怠りませぬぞ、近頃はあまり招待さき多く重りたれば、あれへも此へも不足なきやう一度に參り進せる、最も當家の處は一寸の間も目放し致さぬ、故に怠らず參詣して、不斷の御蔭を蒙りたまへ、一言にて天下の人を活かせ、一息一撫にて、天下の人々を活かし助くるやうに致す、此の活物を見付けたら、取外し、取離しなさるゝな、肉躰は花の如き物で、散らせば何時でも散るが保ち見れば何時までも天地と共に保ち見て樂しまれる、花には實と云ふ物がある、その主用を後にしてはならぬ、無益に遊びたまふな、君父の尼ほど重きものはござらぬぞ、怠つてはならぬ、

天地の御親は八百萬神の總主たる天照大神なり、故に同德同体同席のものなるぞ、此の德を失ふてはならぬ、道の修業は信心ぢや、信心は圓き活物ぢや、その信心の入口で、いかな病も消ね失せるぞ、元來人に病といふは無いものぢや、只邪氣が付くばかりぢや、故に圓い活物

の形が心に生きると、病は自然に消ね失せる、道の入口で生死の迷ひになり、此身その儘生き通しの場に行かれる、然し是は顯明の生き通し、それから生きて行はゞ、生き滿ちた活物となる、それが眞心の活物で、日の大神と一体の生き通しでござる、其處へなると、話もなく又理もなく、只有難く面白く勇しく尊く感ずる、此の活物がよく調へば、活す事自由自在となる、それから幽界へ居直つても、常に顯神へ心が通ふ故、丸生しの自在になられる、天照大神は幽顯一体の本主なるが故、人々此の御親の大神とどちらが高いかと云ふ場に至りたまへ、必ず〳〵活物を見失ひたまふな、道の本体は一つの誠、その誠は日の大神の事で、生き通しの活物が即ち誠ぢや、誠の道と云ふは、活物の滿ち〳〵た生き通しの事と知つて、人々その場に至りたまへ、誰人にても信心を題にして、活物を強くし、活るを見付けて、生き貫きて行きさへすれば、誠の活物へ安々行かれる、此處をしつかりと見付け、その場に至つた方を師として、前後を思はず、内外いかに難かしくとも、それ〳〵丹誠を盡し合つて、それ〳〵上達の尊き活物となり、天下に道を開きたまへや、

尚追々教導する、道は天照大神の活物故、大全世界殘らず日行き屆く處だけは開け渡る道なるぞ、われもし衣を脱ぎ捨てたりとも驚くまいぞ、此方は衣を着て居ても宗忠、衣を脱ぎ捨て裸体になつても宗忠なるぞ、大全世界の者共が誠を以て申す事は晝夜聞き通しに致す故何んなりとも願へ、助け通し、生き通しに恵む、誠の活物を尊みたまへ、我衣を脱ぐは道を早く開き、世界中の人々を早く助け活したき誠故ぞ、誠人は必ず衣を脱ぐまいぞ、その活し助けられる諸人も日の大神同様の、天地と共に活榮へ、德積み榮へ、不究の歡樂自由自在に爲らるゝやう守り活し生すぞ、我の衣を脱ぎし上は、門人に限りなき德備はり、至誠の人を遣ひ、講釋にも禁厭にも、天照大神と此方が付き添ふて勤めさす故、何程でも尊き場が勤まるぞ、誠の活物に爲り得られる人とは、常に一体にて寸暇も放れはせぬぞ、此の誠を聞き傳へ、眞の活物となりたまへ、返す〳〵も眞の活物を尊みたまへ、時に由りては幽界の活物よりも、顯在の活物が尊い事もあるぞ、幽顯一体なるぞ、其元の主が天照大神なるぞ、此方も各々方も隔ては無いぞ、誠の活物となれば皆一体な

るぞ、此の誠の活物を尊む事を怠りたまふな、宗忠の云ふ事が知れたか、聞こゑたか」

これ實に最後の講釋なりき、心地例ならずとは云ひても、その聲は雷の如く、障子も震ひ撼くほどなりき、

(三)

月は入り日は今出るあけぼのに
我こそ道の始めなりけれ

の歌を詠じたるは此の講釋ありし後なりき、

やがてその年は病中に暮れて、翌嘉永三年二月二十四日、庭の白梅そろそろ散りて、天も曇り勝に見ゑし時、美作より野々上帶刀、備前邑久郡より時尾克太郎病氣見舞にとて來りしが、日已に暮れたれば、明日こそ御目に掛らんと、その夜は次の間に通夜し、翌二十五日の朝夙く、庭へ出て日輪を拜み居れる中、左京は枯木の如く痩せ窶れたる身を起して、好める浴に身を清め、

心を潔め、やがて例の如く日拜を終り、例の如く神前に平伏して、天照大神の御開運を祈りたる後、徐かにおのれの居間に入りしが、後は靜かに物音だも聞こねざりき、

宗信は父の容体を聞かんとて、間の襖を開き見たるに、左京は禮服を着したるまゝ、端然と坐りてありき、

「おゝ」と、思はずも聲を掛けて「御氣色は何うでござります、今日は御氣分優れさせぞざりまするか」

されど答なきに不審して、側近くすり寄り見れば、魂魄已に身を放れて、活けるが如く頬笑みし面の上に、蕭條の氣覆ひかゝる、享年七十一、百錬の鋼こゝに摧け、一枝の蘭忽ち折れぬ、宗信は流石に驚きつゝも、亳慌てたる氣色なく、人々に斯くと告げて、最後の別離、誠は涙の中に籠りぬ、

左京が最後の講釋に、招待ありし家々へ一度に行かんと云ひたるに不思議ありき、二十五日の朝、津山本町三丁目の高尾屋藤介にも、同國久米南條郡高尾村の同外傳次郎方にも、備前邑久郡猪平方にも、左京の姿を歴々見き、

その他備中、備前、美作の各地方に、同じ時刻、同じ姿したる左京の訪問を受けたる家多かりき、魂魄約を果せるなり、最後の一刹那、生き通しの實を示せるなり、

宗忠神去りて茲に六十六年、宗忠の教立ちて茲に百年、道は日の神の臨照したまふ限りに開けて、大元の櫻今日を盛りに薫る、此の香りに包まるゝ者、何人が生き通しの歡びを見ざらん、天地は生々たり、山川草木長へに宗忠の德に活く、

第十五章　宗忠大明神

（一）

宗忠が親に事へて至孝に、神に事へて誠忠無二なりしは前の條に記せるが如し、然も宗忠は天照大神を天地の主宰者たる最高の靈神として、常に限りなき眞を運びぬ、天照大神の御開運を願ふは、やがて皇運の隆盛を祈るにあらずして何んぞ、諸外國の果までも、日の大神の御光り遍く行き渡る時あらんと願へりしは、やがて皇運開けさせて、稜威世界の隈々に及ばんことを願へるにあらずして何んぞ、天照大神の御神德無際涯なるを說きて、天下の歸嚮を集めんとしたるは、勤王の大義を眞白なる絹に裏みて、諸人の頭に翳したると同じ義なり、

宗忠に勤王の志ありて、滿身誠忠の血濺ぎりしは「いやたかき雲井に光る君が世の天の下をもてらしたまへや」と詠せし歌の心にても知らる、又たある時の高座に、「今は人に段がついて居るが、やがて段が除れるやうになる、

佛法もおい〳〵衰微してまことに有るか無きかになる、そのとき心を鎭めて此道を守れ」と說きたるにて、深く强く勇ましき心の底を推量し得べし、

日光洽く照る處、草木從ひて生ひ繁る、宗忠に勤王の志厚かりしは、その高弟に河上市之丞、赤木宗一郎、森下景端、翁長門頭（備後神郡豊松村鶴岡八幡宮大宮司）ありしに徵して知るべし、市之丞は門下及び友人に、岡山藩勤王の急先鋒たる牧野權六郎、伊東有涯を持ちたる先覺者にして、赤木宗一郎は神代復古の說敎に、「一天萬乘の大君親しく御政を秉らせられ、皇居が替り、曆が改まりて、中段下段の舊習が皆無となる」との意味を、明治維新を距る十四年前の安政二年五月二日に唱道せる熱誠の人、藤本鐵石は「宗忠大明神」と揮毫して、森下景端に贈り、賴三樹三郎は、長子宗信の印影を刻して黑住家に致せるを思へば、彼等同志の間にも親密なる交際はありしならん、

洛東神樂岡に齋き祀れる宗忠神社は、宗忠誠忠の結晶体なり、純潔なる勤王心の鎭座なり、吉田神祇官家の記錄「安政六未申十一月十九日」の條に

一左の書付を以て段々致嘆願無余義場合に至りゟ付き願面の趣意今日御聞

濟み、塲所の處は追て見分の上可引渡其大取締衆より連印の者へ申渡ゝ

とあるが濫觴なるべし、左の書付とあるは、同年同月宗忠の門人前田榮治郎（丹波桑田郡比賀江村）眞川泰輔（備中阿賀郡實村）船木甚兵衛（伯耆倉吉）加古奈淡路（播磨佐用郡瀧大明神々主）野々上帶刀、翁長門頭、同左一之介、佐伯仁右衛門（伯耆矢橋郡赤崎村）及び赤木宗一郎の九人より差出せる

奉願

作州大庭郡上福田村御靈大明神相殿勸請相成ゝ宗忠大明神の儀譯柄有之其領主役塲添管を以て御本所樣へ返納に相成申ゝ右に付き黑住門人は勿論諸人參詣の爲め御當山に御鎭座之義同志の者一棟奉願上ゝ左願の義御聞濟被爲下ゝはゞ御社建立幷に修覆などは門人より仕度く奉存ゝ間何卒格別の思召を以て願通り御聞濟被爲成度ゝはゞ一同有難仕合奉存ゝ此段宜敷御沙汰可被下ゝ以上

の願書をさして云ふなり、而して文久二年二月二十五日此の地を卜して造

營あり、同じ記錄「元治元子年四月二十五日」の條には

一備前國御野郡今宮同村大明神彌宜黑住左京藤原宗忠文政七年三月二十日受許狀宗忠は嘉永三年二月二十五日同人妻は同元年十月十五日死去、嘉永四年六月十一日宗忠靈神號郁女靈神號（宗忠の妻魂也）等公文所にて濟、同月十八日兩靈合祭黑住靈社號、同月二十日黑住靈社を改め宗忠明神號御幣箱告文等右宗忠門人赤木宗一郎森金爲藏両人依願被納之其後備前國に於て故障の儀有之に付き美作國大庭郡布施上福田村恩智御靈大明神々主芦立雅樂奉仕社と右宗忠明神合殿に相祭、大明神號の儀松平越後守御預り所役人より添狀を以て雅樂相願に付き大明神號御帳勸請取幣箱御告文等被納之

とあり、由てその大体を知るを得べし、而して慶應元年四月十八日、畏れ多くも神樂岡宗忠神社を以て、勅願所と定められ、天下泰平、御寶祚御繁榮の御祈念を命ぜらるゝこと引きも切らず、時には蔭の御禁厭として、禁裡より御撫物を授けられたることすらありき、

宗忠神社が、當時備前に祭祀せられずして、京都神樂岡に造營せられたるは、京都方面の布教傳道に力ありし赤木宗一郎忠春が二條、六條、飛鳥井、五條、野宮、柳原等、公卿殿上人の邸へ伺候して、宗忠の教を說き居たる關係にも由れど、最大の原因は、岡山藩に於て、宗忠を大明神としてその鄕里に祀るを許さゞりしに由る、池田家代々の中にては、藩祖芳烈公（新太郎少將光政）僅かに靈神の社格を許され居れるのみなるに、その城下附近の一小社の禰宜が、大明神の格式をもて祭祀せらるゝは、諸家中の忍び得ざる所なりしならん、一時作州恩智の御靈社（同地久世神社の神職山野陸奥は宗忠の高弟なる故取敢ず之を同地方の御靈社に合祀せるなり）に合祀せられたるも、一時神號を吉田家に還付したるも、諸門人協議して神樂岡に祭祀したるも、皆な此が爲めなり、

されば明治十八年四月十八日、教徒は今の大元に社殿を建營して、こゝに生御魂を齊き祭る、社頭の櫻花年々に咲き榮へて、朝日の光り長へに輝く下、限り無き色を漾へて、芳香千萬里の外に薫る、天は碧に、水は清し、

（三）

黑住教は斯の如く天下に布かる、時に多少の衰盛ありたれど、日光日に明かなる如く、宗忠の道も又日に明かなり、現今信徒百萬に超ゑ、教會の數四百に餘る、大元及び京都神樂岡に於ける神殿に、日ごと參詣の信徒を見ざる無し、誠意、素朴、眞實、活動、陽氣、樂天是れ黑住教の精神なり、實体なり、

而して百萬の信徒を代表し、黑住教の柱石となりて、絕ゑず宗忠大明神の神德を慕ひ且つ教旨を奉ずること極めて深き篤信者に左の諸氏あり

神戸　生島五郎兵衛　安藝　西宗元次郎
紀伊　土井與八郎　因幡　德田音藏
神戸　大森榮介　伯耆　河本長兵衛
因幡　大塚　氏　西宮　辰馬悅叟
伯耆　永見德次郎　伯耆　桑田熊藏
同　桑田勝平　同　桑田邦藏
同　倉光必明　伊豫　矢野通保

同　益尾吉太郎
同　近藤喜兵衛
大坂　平野平兵衛
大阪　尼崎伊三郎
同　岡嶋千代造
神戸　岸本信太郎
御影　大江ウタ
姫路　横谷理之輔
東京　窪田靜太郎
大阪　二見金助
同　那須又三

伯耆　益尾德次郎
靜岡　小林和光吉
堺　平野利兵衛
大阪　生駒權七
同　那須藤助
神戸　和田安兵衛
淡路　倉内春吉
京都　大村直七
東京　齋藤清太郎
大阪　手塚平右衛門
安藝　西宗佐一

黑住教祖一代記 終

324
092

大正三年三月廿五日印刷
大正三年四月一日發行

黑住教祖一代記奥付
（定價 金八拾錢）

著作者　大阪市南區間屋町五十五番地　渡邊霞亭
發行者　大阪市北區東梅田町二八〇番地　武田富彌久
發行者　大阪市南區鰻谷西之町三十二番地　能勢健治
印刷者　大阪市西區新町北通一丁目二十五番地　岩井龜次郎
印刷所　大阪市北區東梅田町二八〇番地　岩井萬文堂
發行所　宗德書院　電話東四九六四番　振替口座大阪一四五三七番
大取次所　岡山市外大元　經世雜誌社　振替口座大阪四三九七番
取次所　岡山市東中山下三丁目　國の教社

終